令和４年度　第２回こまきこども未来館講座運営会議
会議要旨

日　　時	令和５年２月１４日（火）午後６時～午後７時
場　　所	こまきこども未来館　クラブ室（ラピオ３階）
出 席 者	【委員】４名（※敬称略） 玉置崇、長江美津子、植松浩二郎、余語美紀（３名欠席） 【事務局】１１名 こども未来部長、こども未来部次長、多世代交流プラザ所長、事業推進係長、係員（６名） NPO 法人１０人村（受託者）（５名） 【傍聴者】なし
会議資料	次第 資料１　　（こまきこども未来館体験ひろば令和４年度実施内容） 資料２　　（こまきこども未来館体験ひろばアンケート調査結果） 資料３－１（こまきこども未来館ワークショップ便り Vol.2） 資料３－２（こまきこども未来館ワークショップ便り Vol.3） 資料４　　（こまきこども未来館体験ひろば令和５年度実施計画） 資料５　　（こまきこども未来館運営会議　補足資料）
会議内容	１　こども未来部長あいさつ ２　議事 （１）令和４年度講座等実施報告について （２）令和５年度講座等実施計画（案）について
会議要旨	１　こども未来部長あいさつ ・こまきこども未来館につきましては、令和３年３月のオープン以来、新型コロナウィルス感染症対策を講じながらの運営であったが、今年度の「体験ひろば」の活動実績は、交流・体験 CAMP と職員講座、講師講座を合わせて、１２月末までの実績で、講座開催数は７９９回、参加人数は２３，２７２人となっており、新型コロナの影響を受けながらも、多くの子どもたちにご参加いただいている。 ・今年に入り、国が新型コロナの感染症法上の位置づけを、５月に「２類相当」から「５類」に移行する方針が示されたことにより、来年度以降は、子どもたちの安全・安心に配慮しつつ、講座内容や定員なども、取り組みを、一層拡大していけるものと期待している。 ・今後も、「未来リテラシーを育む」、様々な講座や体験活動を実施する「体験ひろば」として、引き続き地域の企業や団体などに積極的な声かけを行い、交流・体験 CAMP の充実を図り、日々試行錯誤を重ねながら、利用者のリピートに繋げていきたいと考えている。 ・本日の会議は、この「体験ひろば」の今年度の実績報告と、来年度の計画案に対し、それぞれの立場からご意見をいただき、より充実した講座等の実施につなげていく大変重要な会議と考えておりますので、委員の皆様には、忌憚のないご意見をいただきますようお願いいたします。

２　議事

（１）令和４年度講座等実施報告について

※事務局より資料１・２の説明

・「ともに育てるしくみ」として、５月と１月に「みんなで育てようワークショップ」を実施した（資料３－１、３－２）。参加者をグループ分けしてグループディスカッションを行った。

・１０月に体験ひろばアンケートを実施（資料２）。対象者は、①小学生②中高生③乳幼児保護者。小学生について、体験ひろばでデジタルデバイス（iPad）を使った体験が楽しいことや、やってみたい内容について意見が多かった。中高生について、体験ひろばに来たことがある割合は２６％だった。行ったことがない理由としては、「何ができるかわからない」が４２％と最も多く、「中高生が利用できることを知らなかった」が２５％となった。保護者について、体験ひろばでよいと思った内容についての問いでは、年齢の低い子どもをもつ保護者には「でっかいくるま」「工作」「手づくりおもちゃで遊ぶ」の子ども自身が遊べることについての割合が高かった。一方、子どもの年齢の高い保護者においては、「講座・ワークショップ」「iPad」がよいという割合が高かった。今後体験ひろばにあるといいなと思われる内容については、家ではできないような体験や専門的な講座内容、イベントをやってほしいなどの意見があった。また、今の未来館に満足しているという回答がある一方、不安な面で、「走り回っているお兄ちゃん、お姉ちゃんが少し怖いと思うことがある。でも小さい子がいると気を付けてくれるので、仕方がないのかなと思っている。」という意見もあった。

・これらを踏まえて、体験ひろばの改善点としては、専門性のある講座内容について年齢の設定を細かくする、iPad などデジタルデバイスを使った内容を強化する、土日祝には多世代で楽しめるイベントを引き続き行う、中高生の体験ひろばの認知度を上げるため講座やイベントを企画し、周知していただくよう学校への協力を依頼する。また、未就学児と小学高学年が同じ場所で走り回ることの懸念については、未来館全体で検討中である。

・未来館連携イベントとして、こまきこども未来大学を実施した。小牧市が SDGs 未来都市に選定されたことから、未来館で子ども向けに企業や団体が講座や交流・体験 CAMP を行っている。

・交流・体験 CAMP は、今年４月から１２月までの実績として２００回実施し、延べ１２，００９人が参加した。年度末の予定としては、
２７１回を予定している。

・講座動画とは、コロナ禍ということもあり、お家で講座が受けられるようにと、実際に未来館で行った講座を撮り、動画をインターネットで公開した。

・発明クラブが今年発足し、今年度は「ワクワクするビー玉転がし装置を創ろう！」を目標に全１３回実施した。

・中高生の利用促進のため、夜ラボを実施した。未来館の交流ひろばにて、金曜日の夜１８時半から２０時まで、デスクトップミュージックやプログラミングをうまく遊びに取り入れながら、中高生向けの講座を実施した。

	≪質疑応答≫
余語委員	おしごと冒険 CAMP が先日行われたが、子どもたちからはどのような感想があったか。
事務局	おしごと職業体験については、職業観を体験した最後に、各５人グループに分けて振り返りの時間を１５分間設けた。仕事をする上でのチームワークの大事さがよくわかったという感想が一番多かった。また来年も参加したい、次はいつやるのかという声もあった。当日、参加した子どもたちに、保護者に向けたお手紙を書いて保護者に渡してもらったところ、後日、それを読んだ母からメールが届き、「自分が働いている姿を前向きに見せられているのかとわかり、ほっとしました。」という感想をいただいた。 また、夏に開催した夏まつりについては、約２０名の子どもが実行委員として参加したが、振り返りでは、「ここでは自分が思いついたことを形に出来る」という感想があったのが印象的だった。来年はその輪を広げながら、子ども達が自主性を持ったことをしてもらえるように、環境づくりを整えていきたい。
植松委員	体験ひろばでの活動内容が充実し、分析されていてすばらしい。子どもたちや保護者の満足度も大事だが、全体のねらいとの整合性を取っていく必要があると思われる。
長江委員	資料２の P.１１　Q７体験ひろばでよいと思った内容について、「でっかいくるま」の割合が多いが、確かに初めて来た人が段ボールで出来たくるまを見て目を引くと思うが、子どもたちはこれをどう楽しんでいるのか、何をよいと思ったのか。
事務局	子どもたちの反応を見ると、車の運転や車に乗ること自体が子ども自身では本来出来ないことであり、子どもたちの中ではなんとなくそれが出来たような気持ちになることが楽しさに繋がっているのではないかと思われる。でっかいくるま内で遊ぶ子どもの姿を見て、保護者もこれがよかったと感じられたのではと思われる。
長江委員	「手づくりおもちゃ」とはどのようなものか。
事務局	主にサポーターが作っている。ごっこ遊びや簡単にボールを転がすという低い年齢の子どもたちが遊べるようなものから、少し年齢の高い子どもたちに向けては、コースを組み替えてペットボトルのふたを転がして遊ぶような、自分たちで工夫が必要なおもちゃがある。
長江委員	お家に帰って、保護者が「これだったらお家で作って遊べる」と思うように、子育て支援に繋がっていくとよいと思う。
事務局	実際に保護者から「家で作ってみます」というような意見もいただいている。基本的に家でもあるようなもの、簡単に作れるようなものを中心に出し

	ている。
玉置委員	FACEBOOK で体験ひろばの様子（写真）を見ているが、本当にいろんな取組みをされている、いろんな方が参加しているという印象を受けた。「未来リテラシーを育む」というのが大きなテーマとなっていて、実際に未来リテラシーを育んだ子どもは何人いるか、将来的に１人、２人いてほしいというのが、大きなミッションだと思う。いろんな体験をして「おもしろかった」だけではもったいない気がする。まだ開館して年数がそんなに経過していないが、今現在、何か答えられるものはあるか。
事務局	未来館は、学校のように毎日通ってもらえるような施設ではないので、難しい部分はあるが、自分で考えたことが形にできるという部分をより強く感じている子どもたちがリピーターになり、自分自身で考えてやりたいことの意見を表明して、それを実際に形にしている子が何名かいる。そういった子をどんどん増やしながら、さらに子どもたちがやれることを増やせる環境づくりをしていくよう考えている。
玉置委員	アンケートに改善点が記載してあるが、一つ一つの講座等のことではなく、全体的な方向として手ごたえがあるのかを知りたい。
事務局	こども参画に参加した子どもたちにどんな変化があったか、保護者にインタビューを行った。学校や家では全然違う姿を未来館では見せてくれるという意見をいただいている。何かしらの子どもたちの健全育成に対して影響が与えられたのではないかと考えている。 <u>（２）令和５年度講座等実施計画（案）について</u> ※事務局より資料４の説明 ・未来大学に関する活動が増えていく予定。未来大学関連の交流・体験 CAMP については、一年間を通して受けられるような体制を考えている。 ・未来リテラシーアイデアコンクールを実施する。子どもたち自身がアイデアを考えて、子どもたちが運営の一部に携われるような形のコンクールを実施する。 ・小牧高校が創立１００周年ということで、未来館で何か出来ないか提案をいただいているので、こども参画として実施していく予定。 ・中高生の利用促進のため、ART PLACE を実施する。中学校、高校の部活動と協働しながら実施していく予定で、学校の校長先生や部活の顧問の先生などに相談しながら、何を中高生が求めているかヒアリングをしていく計画をしている。 ・発明クラブについては、今年度は年間を通して同じメンバーで行っていたが、半期を一期として行う。
余語委員	≪質疑応答≫ 何を子どもたちが喜んでいるかが一番大事。子どもたちの何が育っていったか、また、こういうところを育てたいなというのを考えて次に繋げていきたいと思う。

植松委員	「リテラシー」や「ワークショップ」という言葉では、中高生にはわかりづらいため集まらないのではないか。資料１や資料４は平面で表しているが、構造化できないか。未来リテラシーを育むのかというのが一番のミッションであるので、そこへ向けてこれだけの講座が複合的に絡み合って進んでいくことになるが、まず一つ一つの講座にはどういう目的があって、どういう効果が期待できるのか、演繹性を持ってやっていくのが大事である。楽しさも大事だが、子どもたちが未来を切り拓いていく力を手助けするために、こういうことをやっていく、また、どんな効果が期待できるかなどを、保護者や中高生に伝えて利用してもらうよう促すことも大切だと思う。
長江委員	先日ワークショップに参加させていただいたが、やはり近隣の子どもは通いやすいが、市内でも未来館と離れているところに住んでいる子どもは利用しにくいので、思う存分遊べる子どもは本当に幸せだと感じた。そういった思う存分に遊べる子どもたちが、これからもっと増えていくとよい。学校では出来ないことが、ここでは出来るので本当によい場所だと思った。 乳幼児親子講座の充実もしていってほしい。やはり、「楽しい」というのが基本であり、楽しいとそれを他の人に伝えたくなるものでもあるし、もう一度やってみようと繰り返しやろうとする。そういったことで、力が育まれていくことになると思う。今後も楽しい講座を考えていってほしい。小さい子どもたちが対象だと、五感に触れること、例えば指先を使って感触を楽しんだり、いろんな音を聞いてみたりすることも講座の内容に取り入れると、資料４の Vision『様々な体験を楽しむ環境づくり』に繋がるのではないかと思う。保護者に向けていつどういった講座を行うのかを示せるよう、予定を可視化するのも必要だと思う。
事務局	来年度、触覚に関する講座を１講座増やすよう計画している。
玉置委員	今、教育現場では、「主体的対話的で深い学び」がキーワードで、ここでは深い学びが経験できるのではと思う。誰に指導されなくても、自分でアイデアを出す子を生み出す。未来館でこんな子が誕生したというのを小説やマンガなどの読み物にして周知したら、興味を持ってくれる人もいる。そのようにして未来館の良さを伝えることを新しい手段として今後考えてみてはどうか。 こども家庭庁が４月に発足されるが、児童館の役割も大きく問い直されている。例えば、不登校の子の居場所、サードプレイスが重要視されているが、実態として不登校の子が来館したら受け入れているか、どういったサポートをしているか。
事務局	実際に何人かの不登校の子が平日の昼間に来館している。最初は、他の子がいるとなかなか居づらいので別室で遊ぶが、少しずつ他の子と遊ぶようになっていくことがある。さらに他の子が来た場合の空間づくりをどうしたらよいか、悩んでいる部分はある。コミュニケーターが付きっきりになることがあるので、どういう風に他の子どもたちも含めてやっていったらよいか悩みつつある。小学生の他に、高校生も何人かいる。

玉置委員	不登校特例校があるが、そこでは、自分でスケジュールを立てたり、担任の先生を自分で選んだりしており、このようなこともサードプレイスとして必要だと国も言ってきている。学校教育課とこども未来部が連携しながら、困っている子どもの実態を把握していくのも大事である。 熊本市では、オンラインで不登校の子とつながることができ、その後、４割の子が学校へ来られるようになったとある。一つのコミュニティーが出来て安心できるようになり、学校に来られるようになった。 コロナ禍になり、児童の自殺も増えている。女子中高生は２５％増と言われている。助けを求められる人がいなくて、閉鎖的な空間にいるところに、コミュニケーターが入ることで一人でも救えたらすごいことだと思う。この施設も持つべき意味が深くなってきている。
事務局	他の市内児童館でも不登校の子がいるという報告がある。児童館なら来られそうという雰囲気があり、支援員の方と一緒に部屋を使わせてもらうことは可能かと相談があった。そういった子をしっかりと受入れ、見守っていく、児童館をそういう居場所として形成できたらよいと考えている。
玉置委員	こども家庭庁によると Wi-Fi 環境を充実させることとあるが、どのように考えているか。
事務局	児童館は基本的に人と人とが関わりあって、信頼関係を築きながら、いろんなことを学ぶ場所と考えている。例えば Wi-Fi を使ったゲームなどは、わざわざ児童館でやらなくてよいと思うし、親御さんが Wi-Fi を使って動画を観てお子さんを見ていないというような場面も発生するかもしれないので、あまり積極的に取り入れたくはない。一方、学習面で、学校ではタブレットが配布されており、タブレットで宿題をすることもあるので、すみ分けをどうするかが今後の課題となる。
玉置委員	春日井市では ICT 教育が進んでおり、学校内ではタブレットは文房具の一つとして使われている。例えば、音楽の授業では、歌っているところを動画で撮って後から観るというようなことをしている。授業中にメモを取ったり、英単語をタブレットで調べたりと活用している。タブレットはとても身近なものとなっている。教育現場もこんなに変わってきているので、今までの考え方だけでいくのはもったいない。未来館なので、最先端を行ってみても良いと思う。 【議事（１）（２）⇒事務局案で承認】